

Fate/stay night FANBOOK #6  
2006 summer CHICKEN CHICKEN MACHINE  
not under 18yrs.



MAHOSHIKI:  
aramahoshikoto  
'I wish she were...'

弓×凛  
サーケイ×セイバー

Archer \* Rin  
Sir Kay \* Saber

まほしき



弓×凛  
サーケイ×セイバー  
Archer × Rin  
Sir Kay × Saber

Fate/stay night FANBOOK 02  
2006 summer  
CHICKEN CHICKEN MACHINE  
not under 18yrs.



# 三又表紙。

単冊型の表紙が「作られた」今表紙が「きた」  
後で「ワザワザ」作たら、井上君に「爽やかに  
「没」(V\*)」と云われた「カキ」うた「子」です。  
「ま」...「没」...「ま」...「ま」...

# 前記

■初めましての方も今日和の方もごきげんようでございます。

チキチキ☆マシンの絵描き・田那辺学です。

フェイトえろ本です。

今回田那辺は弓凜、井ノ上さんはサー・ケイ×セイバーです。前回ネコミミ凜が描けなかったので、この度自分はネコミミリベンジです。あべんじゃーであります。

今回テーマは「あらまほしきこと」＝「こうだったら望ましいのにね。」ということで始めました。安易に決めたいは良いものの、多分お互い全然予想外のモノがでてきてしまうんだろうかとビクビクしています。（多分な…）

■Fateアニメ放送が終わってしまいました。アニメで一番何がときめいたって、**小山カ也**き

**りつぐ**ぱぱであります。自然と生理現象でフォントもでかくなるってなもんです。もう一度やりますか。**小山カ也**き（やめなさい。）ゴ

ホンゲフ。なんなんでしょうか…あの大人の漢フェロモンむんむんで深夜にご光臨なされた日には心の如意棒も伸びまくります。ありえないえろさです。リッキー小山のバリトーンとジョージのドリームタッグ。殺される。もえ殺される。生命の危機。

■今回弓凜ではゲスト様呼びしました！ステキ弓凜小説げっとです！わーい！

■それでは誌面も尽きて参りましたのでこの辺で。次のページから自分の弓リン漫画です。拙いものではありますが、暫しのお暇潰しになれば幸いです。



ぼん  
おまじゅう!

ほんっと最悪!

この際士郎は置いていて  
あの二人に見られる  
なんてっ

またぐもって  
いい笑いだわ!!

…それは「愁傷様

感情もってない!

いや…だって

どうしてこんなこと  
なっているのか説明を…

マキト  
ポジション

ぎゅんぎゅん

ハッ当たり

ハッ当たり!?

損じばなしていいのは  
性に合わないもの♡

それにコスプレっちは  
したことないから新鮮

ギガ

とっかわけで  
埋め合わせは  
ちゃんとしていとお

君は一体

ハッ

埋め合わせを  
私でするよ!!



…凜、おい、  
人の話を…っ

**おま**  
そりゃ触られれば  
勃つものは勃つ！

だつたらいいじゃない

大人しくしてなさい

あ。ピクッってなった  
気持ちいいんだ

何がいいんだ！  
二つ二つ強姦って…っおい！

……ん  
ん





どうやら、  
おかしなことが  
起こっている

おかしなことが  
起こっている  
→



ア  
ッ  
ッ

すみません！  
だかわかって  
やっただろう？！



ア  
ッ  
ッ  
ッ  
ッ



ホフ、拭いて...

別にいいわ



おかしなことが  
起こっている

ア  
ッ  
ッ







15px

130

15px  
15px

15px

15px

130

15px

15px

15px

15px

15px

15px

15px



しゅわ

しゅわん

は...  
は...  
は...

は...  
は...  
は...

しゅわん

は...  
は...  
は...

しゅわ

は...

は...  
は...  
は...

しゅわ

は...  
は...  
は...



な...  
...

す  
...

...

...

...  
...

...

...

— 時々

...こんな...事で  
君は何が欲しいんだ?



時々、  
驚かされる



...

...  
そんな事訊くの?

女の貌で  
子供のような目をする

恋人でも何でもない  
関係で、おかしい…？

あなたは…今だけ  
私の「頭」を…

それがちょっと嬉しくて…

…あ、次は素股…  
してあげようか？

セックスで伝わるものなんて  
そう多くはないけど

この4日間だけは  
赦されるかも…  
しれないから…

ネコミミ魔法少女で  
御奉仕えうち、なにか不満？  
せーたくもの

ただ君が、  
泣きそつに見えて

あぁ

いっ  
ぐ  
か

いっ  
ぐ  
か

いっ  
ぐ  
か

いっ  
ぐ  
か

いっ  
ぐ  
か

いっ  
ぐ  
か

あいつもあんたも父親も

なんでか皆、  
水平線ばかり見てるのよね

道路に伸びた  
夕暮れの影、ふたつ

私は繋いだ手ばかり見ていたのに

…うなに…う

未だ追いかける  
あの影法師

ばかみたい

時々、  
驚かされる

君は酷く淋しそうに  
笑うから

あの、優しい影法師

オレンジ色の街並  
二度と手に入らない、一番星



私にとってそれは、やさしくて、甘くて、少しだけ怖いものだった。  
白やピンクみたいな、淡い色をしたもの。触れただけでその暖かさに思わず笑顔がこぼれてしまうような  
柔らかくて幸福なもの。

しんと静まりかえった夜に降るその年初初めての雪とか、夏の空に映える懐かしくてこぼしい香りのする  
麦藁帽子とか、そういう清潔な美しさが似合うもの。

そしておそらく、私には一生似合わないであろうもの。

## One Night with memory.

翠川ミヒロ

「私とあんたにも、何処か似てるどころがあるのかしらね」

吹き上げるビル風をものもしない様子で、遠坂凜はぼつりと呟いた。眼下に広がる夜の街は清廉で美しく、それでいてどこかよそよそしい。父や祖父よりももっと古い時代から遠坂の家が根を下ろす橋向こうの住宅地に比べると、数年前に完成したばかりのこの新都からはどこか冷たくて硬質な匂いがする。

「ほら、言うじゃない？ マスターとサーヴァントはどこか似るものなんだつて」

新都で一番高いビルの屋上に備え付けられている貯水ポンプの上でくると踵を返し、凜は足元よりもっと下方へと声を投げかけた。

「も、とは？」

暗闇がゆらりと蠢いて、深紅の人影が現れる。落ち着いた声の男は、器用にバランスを取りながら凜が歩くポンプに背を預けながら問いかけてきた。

互いの存在を感じあいながらも、視界にその姿を収めないまま話だけを繰り返す。びゅうびゅう、と吹きすさぶ風が彼の赤い着衣の裾をはためかせ、それだけが凜の視界の隅で揺れていた。

「士郎とセイバーよ」

「あの二人が似ているかな。まあ確かに、頑固さと不器用さであるの二人と渡り合える者はそういなさそうだが」

衛宮士郎。そしてセイバー。

最初は似ても似つかぬ組み合わせだと思った。それはもちろん、第三者である凜以上に本人同士がひしひしと感じあっていたことだろう。

何しろ士郎に関して言えば魔術師としては半人前すらほど遠く、未だに入門書の内容を辿っているようなレベルであり、対してセイバーといえばサーヴァント中最強と謳われるカードだ。

それを知っていたからこそ、凜自身も最初はセイバーを引き当てるともりていたし、それさえ実現できれば今回の聖杯戦争にも間違いなく勝ち残れるだろうと思っていた。

しかし実際に彼女を引き当てたのは、他でもないマスター中一番の落ちこぼれと思われる衛宮士郎であり、凜の手にはアーチャーのカードがある。もちろんこれはこれで、今更後悔などないのだけれど。

「あら、アーチャーって意外と人を見る目がないのね」

肩越しに振り返り、悪戯っぽい微笑みで見下ろしてくる。そんな凜にアーチャーはちらりと視線を遣りつつも、どこか興味の薄そうな声でおざなりに問いかけた。

「ふむ、なら君は彼らのどこが似ていると？」



士郎とセイバー。似ていたのは力などではない。足元から照らし上げてくる街の灯りを見下ろしながら、凜は無機質な冷たい夜気をゆつくりと吸い込んだ。

魔術師と夜は切っても切れないほどに縁の深いものだったが、深夜の街並みがかんなんにも頑なで淋しさに溢れたものだというのを知ったのは、聖杯戦争に関するようになったごく最近のことだった。

「高潔なところよ」

きつぱりと言いつつ切る。

そう、似ていたのは本質。力の均衡などは二の次だった。

彼らは確かによく似ている。信念のためならどんな自己犠牲をも厭わない、目をそらしたくなるほどの真摯さ。後ろを見ない潔さと、信じることにかける純粹さ。

恐らく自分には一生理解することはできないだろう、と凜は思う。

努力することは嫌いじゃないし、高みを目指すことは素晴らしい。手加減をすることも好きじゃないし、人並み以上のプライドだってあるつもりだ。

それでも彼らと同じように、真つ直ぐに生きてみようとは思わない。

どうしたらいいか、解らないのだ。例えば挫けた時に起き上がる術だとか、足元から自信を喪失するほどに打ちのめされた時に、どうやって己を立ち直らせばいいのか、という事が。

結果を予想して足が竦み、立ち向かうことに恐怖を覚える。恐らく人ならば、誰しもが抱く感情だろう。だが彼らにはそれが酷く希薄だった。

時折怖くも、羨ましくも思える。彼らのその、純粹さが。

「あの男が高潔、か」

ふ、と薄く嘲笑うアーチャーを振り返りつつ、凜は呆れたような口調で投げかける。

「アーチャー、あなたどうしてそんなに士郎を嫌うわけ？」

「言葉を返すようだが、凜、君はなぜそうまで奴の肩をもつ？」

逆に問い返された言葉に暫し考えをめぐらせたものの、真つ向からこの話題を振ったところでアーチャーからまともな返答を得られるはずもない。理由こそいざ知らず、彼が士郎を毛嫌いしているのは疾うに承知済みの事なのだ。

ため息を吐きつつ、凜は「なんだ、焼きもちか」と小さく呟いてみせる。皮肉は言ってみればアーチャーの専売特許のようなものであり、凜自身にも繰り返し使われていたものだったから御株を奪ったようで少しだけすつとした。

「……凜」

「何よ」

「見えるぞ」

おあつらえ向きな風がタイミングよく吹き上げ、赤いコートをふわりと浮か

び上がらせる。先刻までのささやかな爽快感などにわかに吹き飛び、はたらく裾を慌てて叩き落とす。

「ちよっ……あんたね、覗いたら殺すわよ！ つーか、そういうことはもつと早く言え！」

頬が熱くなるのを感じながら拳を握り締めて抗議するものの、まるでそんなものには初めから興味などないと言わんばかりに背を向けたままのアーチャーがくつくと肩を揺らす。

相変わらずの人を食ったような彼の態度。そもそもサーヴァントのくせにマスターの斜め上を行くなどと、全くもってふてぶてしいにも程がある。

だが苛立ちを顕わにしつつもそれ以上のことが言えない凜には、ただ黙り込んでそっぽを向くことしかできなかった。悔しい、と思わされつつ結局はいつもこうなのだ。

諦め半分で貝になる彼女にアーチャーは暫し苦笑を浮かべていたものの、不意に今まで漂わせていた穏やかな空気を一瞬だけ途切れさせた。

「……アーチャー？」

その違和感は、彼が霊体から実体へ身を転じたときのものに少しだけ似ていた。或いは、その逆にも。

だが咄嗟に見下ろした彼は今までと何ら変わることもなく、弓兵らしい慎重な眼差しで夜を見据えながらそつと静かに佇んでいる。

声をかけようか、少し迷う。先刻まで近いと思っていたはずの距離が、急に遠くなった感じ。漠然と感じる心細さ。

「似ているさ」

強い風の音にかき消されつつも不意に呟かれたアーチャーの言葉は、確かにそんな響きを持って凜の耳に届いた。

「え？」

思わず聞き返そうとした瞬間、今までにない強風に煽られる。傾く視界と崩れるバランス。拙い、と思つた時すでに遅く、目の前がぐるりと反転し、足元に瞬いていたはずの街灯りが空の星へと一転した。

「わっ……きゃあっ！」

反射的に目を瞑つたが、受け身を取らなければならぬこの状況下でその選択は明らかに失敗だった。だが一度瞑つてしまえば、再び目を開けることの方が恐怖になる。

凜、と名を呼ばれた気がした。

「——っ、いたたた」

自分の身長の上二倍以上ある高さから重力に則って落下した割には、痛みが少なく、叩きつけられたのは冷たいコンクリートの地面ではなく、導かれるようにして収まった腕の中。

恐る恐る目を開けると、予想を裏切らない表情を浮かべたアーチャーが至近距離で覗き込んできていた。たつぷりと間を取ってからやれやれと深いため息を吐いた彼は、君は一体何がしたいんだ？と呆れ口調で問いかけてくる。

「ごめん、動揺した……」

「それはこちらの台詞だ」

怪我でもしたらどうする、と言いながら吐いた二度目の彼の溜め息に先刻と違った感情が驚くほどに含まれていたので、凜は胸のうちで激しく動揺する。子供でもあるまいし、按じられることに喜びを見出すなんて今夜の自分はどうかしている。

そんな風に己を戒めつつも、頭のどこかでは彼とのこの距離の近ささえも意識した。肩に置かれた手のひらの大きさ。失態と妙な方向に働く思考のせいで、先刻の比になどならないくらい顔が熱かった。

こんな風に思う事自体が癪ではあるが、とりあえず暗闇の中で良かった、とこっそり胸をなでおろす。

「なによ、サーヴァントのくせに、マスターもろくに守れないの？」

なるべくわかりにくいようにして顔を背けながら、わざと威勢よく振舞った。こういう素直じゃない自分には心の底から嫌悪するものの、そういう風にしか生きることしかできないのだから仕方がない。

士郎やセイバーが自分に正直すぎるくらいに生き方しかできないように、遠坂凜はこうしてささやかな虚勢を張り続けることでしか自分を確立できないのだから。

そんな凜の憂鬱を知ってか知らずか、アーチャーはやれやれ、とこの夜三度目になる溜め息を吐いてから己のマスターを正面から見据え、名前を呼んだ。

「いいか、凜」

「勘違いしてもらっては困る。戦時下ならまだしも、サーヴァントとて四六時中マスターを監視していられるわけじゃない。何より私は、君を魔術師として高く評価している。少なくとも私が傍にいられないような場面で、ある程度ならばきちんと己の身を護ってくれるだろうとな」

「うっ……」

お説教魔め、と胸のうちで悪態を吐きつつも、アーチャーの言うことは正論だ。返す言葉もない凜には、ただただ恐縮することしかできない。

「だがどうやらそれも私の買い被りだったようだ。如何に己のサーヴァント相手とはいえ、自分の不注意を棚に上げてその非を当てこするうだなどと、全くもって……」

「あーっ、わかったわかった、私が悪かったわよ。もういいでしょ、離してっつてば」

くどくどと続く言葉はどうせわかっている。いつもがそうだとはいわれない

が、確かに今回の事だけで見れば明らかに自分の方に非があるのだ。

大人しく謝ってとりあえずここは逃げ出そう、と身を振ったものの、振りほどこうと思った腕が思わぬ抵抗を受けた。抱かれた肩や支えてくる腕が、開放を赦してくれなかったのだ。

「……アーチャー？」

いつの間にか彼の纏う空気が先刻のものに摩り替わっていて、凜は思わず固唾を呑んだ。有り得ないはずの緊張が、身体に走る。

「本当に、笑ってしまうくらいよく似ているよ。私と君は」

「……」

耳元で囁かれた言葉。ゆっくりと顔を上げると、暗闇の中でアーチャーは自嘲にも似た笑みを浮かべていた。自分を見下ろしてくるどこか淋しそうな瞳に、凜は漠然とした彼の弱さのようなものを感じる。何がそんなにも、哀しいのだろうか。

その頬に手を伸ばしたのは、無意識だった。慰めたい、と心のどこかで思ったのかも知れない。だが恐らくそこにはつきりとした自発的な意識のようなものはなかった。

ただ、可哀想だと思ったのだ。得体の知れない何ものかに、押しつぶされそうになる彼が。

触れた指先は、ひんやりとしていてとても冷たい。

何が彼を、そんなにも苦しめているのだろうか。

彼は一体、何を。

「ねえアーチャー、あなたもしかして本当は——」

そこまで言ったところで、ゆっくりと唇を塞がれた。不思議と、怖さや理不尽さは感じなかった。

繋がっているせいだろうか。彼の哀しみに近い深い虚無感が自分の中にも流れてきて、それがどうしようもない遣る瀬無さになる。

こんな遣り方を卑怯だと思わないわけじゃない。それでも、彼がこれで少しでも救われるのならそれでもいいような気がしたのだ。

そうれにもう、今後二度とこんなことはないだろう。何故なら彼はそういう人だ。だから別に、構わない。

そんな自分への言い訳を考えることで漠然と暮る淋しさを紛らわせながら、凜は静かに瞳を閉じた。

□ □ □

妙な高揚感で目が覚めた。ぼんやりとした頭で辺りをきよきよと見回すと、そこには見慣れた放課後の景色が広がっている。

夕暮れ時の教室には、凜を除いて誰もいない。穏やかにゆつくりと、夕刻の時間がただ刻み込まれていくだけだった。五時四十五分。あと十五分で、下校を報せるチャイムが鳴る。

「あー、夢かあ……」

ひとりごちてゆつくりと顔を上げる。なぜ自分がこんなところで寝てしまっていたのか、記憶の糸を手繰ろうとしたものの億劫になってすぐに放棄する。聖杯戦争の終わった今、疲弊した身体は眠りを要求し、傷ついた心は休息を求めている。もちろんそれに抗う理由などどこにもないので、凜は流れに身を任せるようにしてただひたすらに欲求を満たすことにしている。眠ければ眠るし、何も考えたくなければ考えない。

そんな自由で気ままな生き方を咎める相手など、今となってはもうどこにも居ないのだから。

机の脇に掛けっぱなしになっていた鞆から手鏡を取り出し、まだ眠そうにする自分の顔をそつと映す。

「げっ、痕ついでる」

腕に額を押し付けて眠っていたせいで、ブラウスの皺がくつきりとそこに刻まれている。前髪に隠れる場所だからまあいいか、と投げやりに思いながら大きくひとつ伸びをしたところで、不意に教室のドアが開いた。

「遠坂」

人好きのする屈託のない笑顔を浮かべながら顔を出したのは、C組の衛宮士郎。彼の持つ独特の穏やかさは嫌いではなかったが、少なくともこのタイミングで会いたい相手ではなかった。

「なんだ、寝てたのか？」

「んー、ちょっと寝不足で」

揃えた指先で前髪を直しながら言うと、凜の正面の椅子を引いた彼は不思議そうな表情で「寝不足？ 聖杯戦争も終わって、こんなに平和になったのか？」と問いかけてきた。

緋色に染まる暖かい夕暮れ時の教室には、グラウンドで部活動をする生徒の声がどこか遠くに響いている。ぼんやりと窓の外に視線を遣りながら、凜は士郎の言葉の意味を噛み締めた。

「平和、かあ……そうね、確かに士郎の言うとおりでわ」

もう、自分たちの傍にサーヴァントはいない。それが平和と言うことなのだ。彼らは聖杯戦争の象徴とも呼べる存在だった。現世に馴染むことはない、イレギュラーな英霊たち。

ふと視線を戻すと、微かに俯いた士郎の横顔には明確な差し込む影が見て取れた。恐らくは、思い出しているのだろう。想いを寄せ合いながらも共に生きるために別離を選んだ、時として哀しいほどに真摯だった彼女の言葉を。

「そんな風にあからさまに傷ついた顔されたって、慰めてなんかあげられないわよ？」

「別に、そんなつもりないさ」

ほんの少し困ったような色を浮かべて笑うその仕草に、やっぱり同じ人間なんだなあ、と凜は思う。彼も、アーチャーも、ごく稀に似たような笑いをする時があるのだ。それに気づいたのはごく最近のことなだけだ。

「ねえ、士郎はもうセイバーを諦めたの？」

「遠坂？」

気がつけば、そんな台詞を口にしていた。言っただけ、こんなことを聞いてどうなるというのだろうか、と思っただけ、それでも今更誤魔化すのさえ面倒に感じられて、このまま流れに委ねることにする。

「セイバーにもう一度逢うためなら、どんなことでもする？ 例えばずっと待ったりとかって、できるもの？」

後を押すような言葉を吐いたが、思いのほかそれは真摯な響きを持つて出た。もしかすると、自分でもそうと思わないうちに聞きたくて仕方がなくなっていたことなのかもしれない。

暫く考え込むような素振りを見せていたが、ゆつくりと顔を上げた士郎は真っ直ぐに凜を見据え、そうだな、と深く頷いた。

「そうだな……たぶん、できると思うよ。というか、どんなことだってしてやりたい。あいつにもう一度逢うためなら、なんだってできる気がする」

自信に溢れた笑顔向けられ、凜は間違いなく自分の胸の奥のどこかが疼くのを感じる。痛み、にも似た感情。だがそれがどういう理屈で自分の胸をざわつかせているのかは、解らなかつた。

嬉しそうに、そして誇らしげにセイバーを語る士郎。叶わないことは解っている道が最善のものであるようにと、友人として、同志として、時にはそれ以上の存在として、自分は確かに二人の幸せを願っていたはずなのに。

「半人前のくせにして、笑わないのか？」

「馬鹿ね、笑ったりなんてしないわよ」

薄く笑って、短く切り返した。やはり適わない、と思う。彼らのその無防備

すぎるくらいに純粹なところや、絶望的に高潔なところには。

「遠坂」

ふと、士郎が不振気な声で呼びかけてくる。怪訝そうな表情に、凜は瞳を瞬かせた。

「なによ」

「お前、大丈夫か？」

「は？」

「その……」

珍しく言葉を躊躇う士郎を促すと、彼は困りはてた末にこんな台詞を吐いてきた。

「なんか、変な顔してるぞ」

思考よりも、身体が先に動いた。いわゆる、反射神経と言うやつだ。

「そんな力いっぱい殴る事ないだろ！」

「殴られて当然よ！ バカ士郎！」

捨て台詞を吐いて教室を後にする。

残された士郎は暫くの間がんと痛む頭を擦りながら、己の師の手の早さに深々とため息を零していた。

□ □ □

すっかり頭に血が上った状態で廊下を踏みしめると、階段の踊場で勢いよく人影とぶつかりかけた。立ち位置の関係であやうく凜の方が相手を階段から落とす形になりかけたものの、咄嗟に手を伸ばしてなんとか引き上げてやる。

だが意外にもそれはよくよく見知った相手であり、凜の怒りを孕んだ形相に思わず驚いたのか彼女は目を丸くして覗き込んできた。

「どうしたんですか？ 遠坂先輩」

一学年下の間桐桜にそう訊ねられ、凜は思わず怒りに任せて「どうもこうもないわよ、全く士郎ってば、」と言いかけ、そこではっと口をつぐむ。

「衛宮先輩、ですか？」

「……ごめん、なんでもないわ」

常と違うきつぱりとしらない凜の態度を前にして、桜は不思議そうに首を傾げつつも怪訝そうな表情を浮かべている。

出来れば余計な不振は煽りたくない。桜とて、先の聖杯戦争で傷ついたうちの一人なのだ。これからは自由に恋愛をして、幸せになる権利がある。もちろん今回の件に関わり生き延びたものすべてにそれは言えることだが、恐らくは誰よりも不遇を受けていた桜にこそこれからは一番に自由であってほしいと凜は思う。

だからこそそれをよりによって自分が壊すことなど、あつてはならないことなのだ。

「遅いのね、桜」

肩にかかった髪を後ろに流しながら、勤めて自然になるように凜は話題を変えた。

「いえ、道場の鍵を返しにきただけです。もう帰りますよ」

「そうなの。あ、衛宮君ならA組の教室にいたわよ」

「はい」

さりげなく促して場を離れる。自分たちの距離は、今はまだこのくらいがいい。

だが踵を返して階段を降りはじめた凜の背中へ、意外にも桜の方から声をかけてきた。

「先輩、遠坂先輩のこと心配してるんですよ」

「はあ？ 心配？」

踊り場の窓から差し込む逆光で、桜の表情が読み取れない。笑っているのかもしれないし、怒っているのかもしれないし、或いは拗ねているのかもしれない。

だがその声だけは、酷く穏やかなものだった。

「違ったらごめんなさい。でも——」

□ □ □

勢いよく屋上の扉を開け放つ。

暮れかけた夕日に辺り一面炎を浴びたかのように染め上げられ、それが息を飲むほどの美しさだった。

「何なのよ——」

走りよったフェンスに手を着き、肩で息をする。一気に階段を駆け上がったせいで息が上がり、繰り返すたびにひゅうひゅうと喉や器官を切る呼吸が酷く苦しかった。

動揺していた。酷く、心が乱れている。士郎の言葉と、桜の言葉が耳の奥で訴える。

——あいつにもう一度逢うためなら、なんだってできる気がする。

あの時、明らかに自分は傷ついていた。彼の言葉に、誰かの意思を重ねていた。セイバーに逢いたい士郎。そしてそれを叶えたアーチャー。

——姉さん、泣きそうな顔してますよ。

「ばっかみたい……」

なぜ、傷ついたりしたのだろう。なぜ、痛いなんて思ってしまったのだろう。がしゃん、と力任せにフェンスに拳を叩きつける。何度も、それを何度も繰り返したところで、咎めてくれる人はもういない。

もう、いないのだ。

哀しくなんかないたくない。こんなことをしたら惨めになるばかりだと解りきっているのに、あとからあとから涙がどんどん溢れてくる。強烈な喪失感。麻痺していた感覚が、一気に蘇ってくる感じ。

嗚咽を繰り返しながら、ずるずるとその場にしゃがみ込む。冷たいコンクリート地を感じたくもない孤独を際立たせてくるようで、益々哀しくなってくる。

こうして泣くことに、何の意味があるというのだろう。どれだけ願っても、どんなに祈っても、もう何も戻らないのに。だからずっと、泣かなかったのに。

今になって気づく。いつの日か、自分たちを似ていると言ったアーチャーのその言葉の意味を。

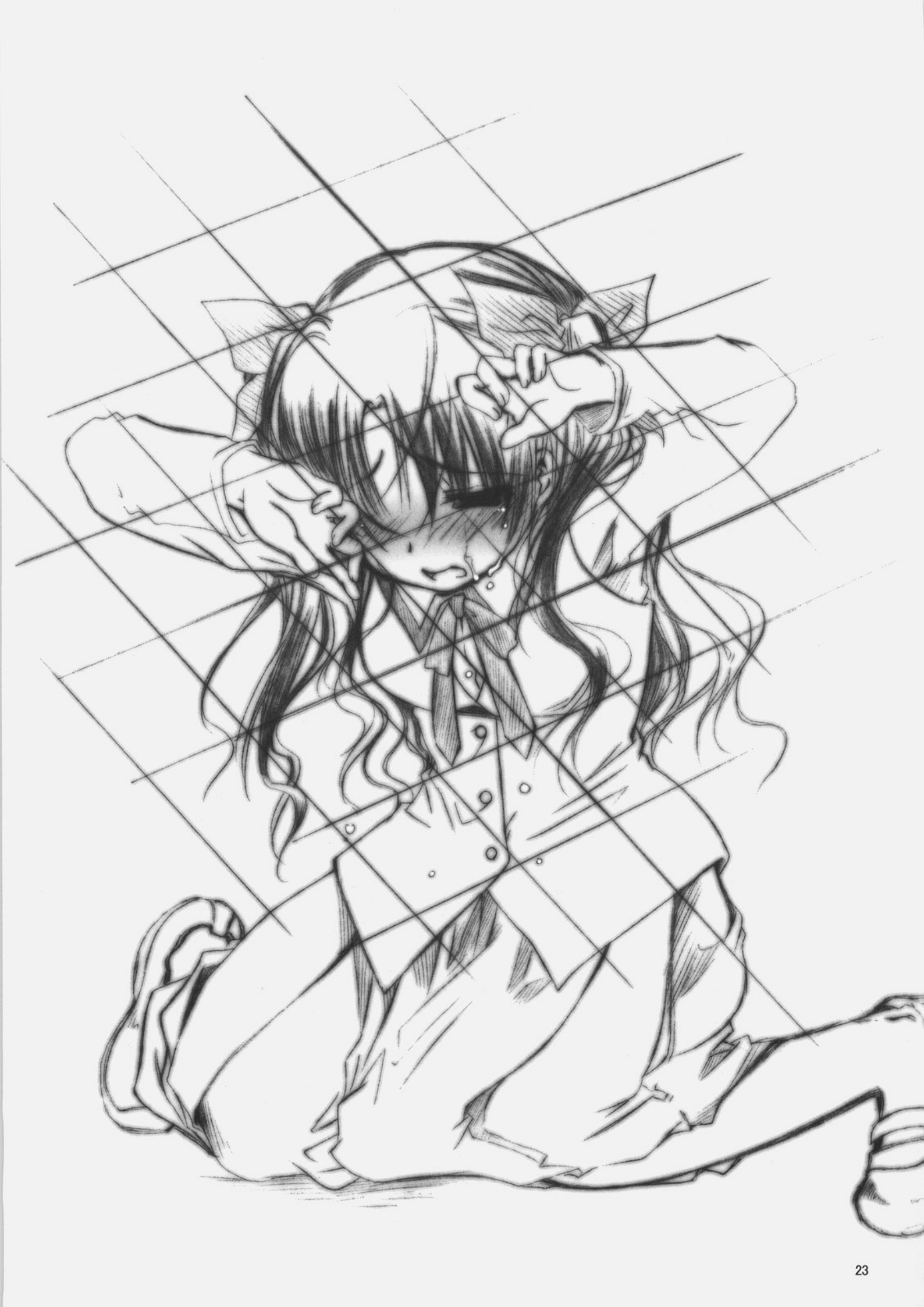
こんな風にいずれ彼も後悔するようになるのだとすれば、自分たちは本当によく似ている。いつだって想いは叶わない。いつだって、いつだって。

下校を告げるチャイムの音が響き渡る。それに促されるようにしてゆっくりと顔を上げると、眩いまでの夕陽に涙を照らされた。視界すら眩むほどの眩い光に彼を想い、そこでやっと理解した。

あまりの自分の思い違いに、なんだか滑稽さすら感じてしまう。なぜならそれは、もっと美しく、切なくて、優しいものだと思っていた。こんなにも衝動的で、哀しくて、渴いたものだと思わなかったから。

「ああ、そうか——」

——これが、恋だったんだ。



# ゴクマコミ

「まほしき」発行おめでとございます！  
お呼びいただきありがとうございますってうか、

## なんだろうこの話……。

もはやホラーの域です。

いろいろお目汚し申し訳ありませんでした。収まりつかずこの大赦です。心意気だけは超本気モードでした……。初めてFateをやらせていただきました。Fateはとても愛しているのですがなかなか書く機会に恵まれず、ただあれば絶対に凛の失恋話にしようと思心決めていたわけです。が、何もそれをいまここでやらずとも自分……みたいな感じです。なんかもう、問答無用に悲壮感があふれています（私の）本の趣旨がえるだということはちゃんと前もって聞かされていたのですが、それに沿えなかったのはただに私の頭がパーサク状態だっただけです。おかげさまでこの話が何ルートの後なのか自分でもさっぱりわかりません。ほんとすみません。でも凛がいっぱい書いて幸せだった……ハァハァ。しかしせっかく機会をいただいたのだからお世話になっているお二人に少しでも恩返しを、と思ったのですがもはやそれは思っただけに終わりました。思っただけってアンタ……素で凹むわ……。

普段はアニメとかまんがとかのジャンルで小話的なものを書きつつ飽きたら薄暗いどんづまり長編を出すというしみつたれた活動を行っています。女性向けオンリーで、年内いっぱいはこの方向。

翠川ミヒロ / mihiroom@green.ocn.ne.jp



ミヒロさん本当に本当に心の底からありがとう  
ございました！  
何が幸せて、この原稿を世界で二番目に読めた  
ことが本当に本気で幸せです！  
完全にただのキモイファンで申し訳ありません…orz  
たなべ共々また遊んでやって頂きつつ、  
キモイと言っていたら、チキチキ☆マシーン  
本望です。  
本当に今回は無理きいて頂きましてありがとう  
ございました！幸せ！

ミヒロさんありがとうございました!!お食事しながら凄い  
勢いで原稿強奪手順を踏んですみませ…！でも超幸せです  
！ハァハァ…こちらこそいつもありがとうございます。  
ありえねーですよ！このステキ弓凛！屋上の凛たんは私を  
殺そうとしますね!?弓は時空を越えたセイバーバパラッ  
チ…ああもう大好き(´▽`\*)  
また今度ぜひフェイト話してやってくださいw



ぐちゃりと、濡れた音が室内に響く。それに追従するように、荒い息が引つ切り無しに繰り返される。

少女の身体が男の上で揺れる。自ら秘所を男の下腹に擦りつけ、腰を振る少女に男は嘲る様に口の端を上げた。

濡れ滴る柔らかな場所が、反応しきつた昂ぶりを擦り上げる。

「ん…あ…」

少女の声が細く上がる。背を反らせて喘ぐ少女の膝は既に何度かベッドの上に崩れ落ちていた。

寝そべり少女を見上げていた男が身を起す。自らの足の上に座り込むような形になった少女の肩を男は掴んだ。力の入らない身体を、引きずり起す。

「どうした、気持ちよくしてくれるんじゃないのか」

商売女に掛けるような容赦のない言葉に、少女の華奢な身体が震える。

「めんなさ…いえ、すみません」

澄んだ声は酷く掠れていた。もう一度敷布の上に膝を付き、腰を乗り上げる。

「はっ…っ…はあっ…」

ぐちゃぐちゃと濡れた髪は男のものを少しだけ包んでは離れていく。硬く熱いもので敏感な場所を擦りたてられ、少女は男の腹の上で喘ぎ声を上げた。

挿れてもいいと言われるまでこうして濡れた秘所を擦り付けるといのが男の指示で、必死に膝を使い腰を揺らす。ほとんどぶくらんでいない微かな乳房がその度に揺れ、その刺激で乳首の先が尖る。

「随分いやらしいんだな」

押搦する声を掛けた男は、目の前で揺れる赤く染まった乳首を摘み上げた。

「ひっ…っ…」

柔らかさの欠片もない指先に、悲鳴が上がる。

「ほら、どうした。腰が止まっているぞ」

「やっ……はい」

腰から双丘に掛けてを、男の掌が滑る。男の声のなすがまま、少女は前後運動を繰り返した。熱っぽい息が繰り返して吐き出され、男の髪に触れる。

「うん…っ…」

頭を振る少女はけれど、その行為をやめはしなかった。

「随分上手くなったじゃないか、アルトリア」

「…その名前を…」

耳元に吹き込まれた自らの名前に、少女がきつく首を振る。激しい拒絶に、男は声を立てて笑った。

少女の頬は既に赤く染まり、その瞳はきつく閉じられている。寄せられた眉根は快楽と羞恥の両方のためか酷く苦しうに寄せられ、金の髪がさらさらと音を立てて揺れる。

触れる体温は、酷く熱い。少女だけでなく自分もそうなのだろうと男は息を吐いた。

金の髪の残像に眩暈がする。こめかみを突き刺すような痛みが走って、男は瞳を閉じた。

どうしてこんな馬鹿なことになったのか。ただそれだけを、思った。



「サー・ケイ。マールリン様がお呼びです。お手数ですが、足労願えませんでしょうか」

誰のものだったか覚えていない従者兼城の小間使いとして働いている少年が部屋に入って来た時、男——サー・ケイは帳簿の確認作業を行っていた。

大仰な椅子に腰掛け机上の帳簿を睨んでいた砂色の頭を上げる。濃い褐色の瞳が、少年を見据える。不機嫌に見える眇められた瞳に少年が息を呑むのに、ケイはため息を吐いた。

呼び出した元は、この城の主にすら敬われる化け物のようなじいさんで。賢人であり魔法使いでもあるその人の依頼を断れるものはいなかった。例え、今年の麦の収穫量と税として納め



られたものの確認が済んでいなくとも、行かなくてはならない。

「分かった、行こう」

変わらず不機嫌そうに眉を蹙めたまま、それでもケイが立ち上がるのに少年が安堵の息を吐くのが目に入る。いつそ断つてやればよかったかと胸の内を舌打ちを落とし、それでもケイは部屋を出た。

少年の靴が立てる音とケイの靴が立てる音が重なり、石造りの回廊に響く。本人の望みで城の地下深く奥まった場所にあるマーリンの住居には何度か足を運んだことがあった。この城の全てに精通する国務長官としても、一人でたどり着けない場所ではなかったが、ケイは少年が先導するに任せた。仕事を邪魔されて人に気を使ってやるほど、優しい性格でもない。

ぼんやりと、堅固に作られた華美さのほとんどない壁を見る。度重なる戦は全く終わる気配を見せず、この城には常に浮き足立った戦の匂いが染み付いている。

今もまた。攻めてくる隣国との戦は小康状態を保っているだけで、だからこそ大きく大きな衝突の前に兵糧を確保しなかったのにと、ケイは今度こそはっきりと舌打ちを落とした。

この城に集う勇敢な騎士共は戦となれば力を発揮するものの、この城の中ではただの大飯喰らひばかりで、誰も彼もが内務や政務に向かない。そのために文官の長を押し付けられたケイの前には溢れるほどの仕事に置かれていた。

「どうかなさいましたか？」

「何でもない。さっさと行け」

不安そうにケイを見上げる少年に、さっさと先導しろと手を払う。元々ケイが苦手なのであろう覚えた少年が瞳を歪めたが、それに頓着するようなら始めから遠巻きになどされたい。特に問題も感じずに、ケイは足を進めた。

迷路のように入り組んだ細い階段の突き当たりに、その小さな部屋はあった。

昼間でも灯りの必要な闇に包まれた空間に、いつもの如くロープ姿で佇む老人をケイは眇めた瞳で見やっした。

「お呼びにより参上いたしました、どういった用向きで」

挨拶も何も無く、単刀直入に告げる。不機嫌な顔を隠しもしないケイに、マーリンはいつもと変わらず何を考えているのか読めない微笑を浮かべたまま、かつかき笑った。

狭くじつとりと空気の籠る部屋の中に、高らかな笑い声が響く。それが神経に障って、「ケ

イは額を押さえた。

大体においてケイはこの老人が苦手だった。何を考えているのか分からず、ケイにとつての無理難題を押し付けてくる。

「ご足労いたみいる。今日はお前さんに頼みがあったな」

予想通りの言葉に、ケイは唇を歪めた。大体この老人の話は、この切り口で始まる。

「お役に立てるかばかりかねますが、聞くだけなら伺いましょう」

冷たく響くケイの言葉に頓着した様子もなく、マーリンは手にした杖で石をはめ込んだ床を叩いた。カンツと高い音が響き、反響する。

「女子を二人、躰けて欲しいのだ」

マーリンの唇が釣り上る。少し下卑たその笑みに言葉の意味を理解して、ケイは再び額を押さえた。何を考えているのか分からないのはいつものことで、何を言っているのか分からないことも多かったが、それにしても今回のこれは群を抜いている。

「お伺いしますが、誰に、何を、ご依頼ですか」

「そなたに、女子の、躰を」

一言一言区切ったケイの意図が分からない訳でもないだろうマーリンは、しかし変わらず笑みを浮かべている。頭痛を呼ぶのは怒りというよりも未れで、ケイは少しばかり肩を落とした。からかっているのかと、そう思う。

「そんなものは女術にでも任せなさい」

ほとんど吐き棄てるように告げ、ケイは踵を返す。その背中にマーリンは呟くような言葉を向けた。

「女子の名は、アルトリアと言つ」

瞬間、脳裏を駆け抜けた熱を何とと言うのか、ケイは分からなかった。

「何故あの方が…」

呆然と、呟く。振り返ったケイの前でマーリンは、いつも浮かべている笑みを消した。

「近く戦が再開される。あちらの王は好色な方だ、女であれば近くへ上がる事が出来る」

「ですが！」

反射的に上がった声は思いのほか強いもので、ケイは自らの声の大きさに息を呑んだ。

「わが軍には戦う力を持った女子は、あの方しかおらん」

確かにその言葉は正しかった。この城にいる女は全て守られるべき貴婦人たちで、端女にいたるまで細作としてですら利用できそうな者の顔はケイの脳裏に浮かばない。

けれど最も尊ぶべき人へそのような忌むべきものを教え込むなど、出来るはずもない。そして何より彼女は、この城の中で女として生きてはいなかった。

「あの方の望まれたことだ。お前さんが断れば別のものに頼まねばならん」

その言葉が脳内で意味を持った瞬間、目の前が真っ白になった。

「誰かが……？」

呆然と呟いた言葉は、ほとんど意味を持っていない。

「そう、誰かだな」

静かに繰り返されたマーリンの言葉に、ケイは肩を落とした。術中に嵌ったのは分かりすぎるほど理解している。けれど、誰かこの城内の男が彼女をその腕に抱くなど、許されるはずもない。

ゆっくりと、頭を振る。戦場では誰よりも先頭を駆け抜けていく青の残像が、目の奥に蘇る。

誰よりも真つ直ぐに美しい、この城の主。

その肢体が誰か男に抱かれている幻影に、首を振った。そう、そんな事は許されるはずもない。

「…分かりました。お受けいたしましたよう」

搾り出すような声は、掠れて歪んでいた。その言葉にマーリンが口の端を上げる。

「今晚そちらに向かわせる故、頼みましたぞ」

無言でケイは、再びマーリンに背を向けた。

「……」

盛大に舌打ちを落とす。挨拶もせず、ケイはそのままその部屋を出た。帰りはさすがに先導はない階段を、ゆっくりと昇る。

胸の内に湧き上がってくる感情が全て、怒りで真つ赤に染まっている気がして、ケイは自らの掌に爪を立てた。

彼女が、自らの戴く主がどんな表情でそれを望んだのか、見ていなくとも分かる。いつもと同じ、冷静に全てを見詰める揺れない瞳と義務感によって決めたのだろうと、そう。

当たり前のように何も欲しがらず、ただ義務を果たす横顔。その顔を数え切れないほどケイ

は見た。

あの時、あの剣を引き抜いた時もそうだった。何も望まずただこの兄のため、彼女は石から剣を引き抜いた。あの日、弟として従者として傍にいた妹が大いなる力を持つものだと思った日のことを、忘れることができない。世界の全てが一変した。付き従う弟は、戴くべき主へと。そして主のためそしてこの国のため、ケイもまた共に戦ってきた。けれど彼女が自己を犠牲にする姿を見ることが増えるばかりで。ほとんど笑うことも無くなった主は、今ケイに酷く残酷な依頼をする。

怒りがむしろ哀しさを呼んで、ケイは足を止めた。回廊の窓から、下を見下ろす。彼女がケイが守ろうとする地と、そこに生きる人々。それに一度だけ目を伏せて、ケイは再び歩き出した。

部屋に戻り、帳簿の続きに目を落とす。それでもやらなければならないことは、呆れるほどにあった。この先に何が待っているようにも、義務だけは果たさなければならぬ。

そしてどれだけの時間が経ったのか。ケイが数字の羅列から目を上げたときには、既に周囲は静けさが満ちていた。冷たい夜の空気が、締め切った部屋の中にも入ってくる。軽く身震いすると同時に、扉が叩かれる音が微かに聞こえて、ケイはゆっくりと立ち上がった。

躊躇することなく、扉を開く。目の前に立つのは、金の髪の少女だった。

「よろしいですか、兄上」

硬い声で告げて、中に入る。何のために来たのかなど尋ねることもなく分かっていることで、ケイはただ無言で少女を奥へと促した。

執務室と二つながりになったベッドルームに連れて行く。どうして彼女が頭からマントを被っていたのか、それが落とされて初めてケイは気づいた。

部屋の中央に、花が咲いたような錯覚に、眩暈がする。

身に纏うのは、真紅のドレス。いつも身に着けている鮮やかな青とはあまりに違つそのドレスは柔らかく身を包み、あまり成長しない少女めいた華奢な身体を線をはっきりと見せる。いつも固く結び上げられた金の髪はまっすぐに肩に下り、美しく整った顔を引き立てていた。これ程女性を意識する姿の少女を見たことはない。

けれど。

少し表情を強張らせたまま、少女は無言で頭を下げた。その瞳は、いつどんな時も変わらぬ

王のもので。冷静に冷徹に遠くを見る、義務と責任を見誤らない、音頭の低い瞳。

ケイは頭の中で呪いの言葉を吐き捨てた。あの老人をどれたけ憎悪しても飽き足らない。どうして自分に、よりによって自分にこんな役割を与えたのか。ずっと昔、また力を持たぬ子供だった頃から――代わりに何一つ義務も責任もなかった頃から少女を知る自分に。

それでも、誰か他の人間に頼むことは考えなかった。許せるはずもない。

幼い頃、少年として育てられた妹を守るのは自分なのだと、そうケイは当たり前のように信じていた。大切で大切で大切で、他に言葉を見つけないことが出来ない。今もまた、彼女を守るために助けるためにケイはここにいる。けれどその思いの先には誰なのか。そして今の彼女に、自分の力は必要なのか、分からない。

「お願いします」

それでもその指先が震えているのが目に入って、ケイは瞳を閉じた。頼まれたのは、身を売る女性の流儀。踏み出す少女にも、背を押した老人にも、そして首肯した自分にも怒りが沸いて、指先が痺れる。

「服を脱げ」

低い声で、告げる。そしてケイは値踏みするような視線でアルトリアを見た。見たこともないような冷えた視線に、アルトリアが目を見開く。それに唇を歪めて、ケイは言葉を重ねた。

「私にやらせるつもりか。脱いで体を見せてみる」

恥らうように頬を染め、それでもアルトリアはドレスの胸元に手を伸ばした。ゆっくりと紐を解き、真紅の布が床へと落ちる。露になった、内側から光り輝くような白い肌に、ケイは唾液を飲み込んだ。それでも女性である妹の肌を見たことなど、今まで一度たりともない。

ただ、美しいと思った。情欲を掻き立てるよりも、清廉さが際立つ姿はけれど、だからこそ汚したいという欲望を煽る。

「下着も外せ」

当たり前のごとくのように告げる声に、アルトリアは瞳を伏せた。細い柳眉が寄り、彼女の中の葛藤が見える。それでもアルトリアは、おずおずと下着にも指を伸ばした。

ドレスよりも時間を掛けて、身を包み隠していた布地がほとんど全て取り払われる。

「これでいいのですか」

残っているのは絹の靴下だけで。羞恥に身を縮ませ俯くアルトリアを、ケイは無遠慮な視線

で嘗め回すように見た。

少女めいた身体は成長しきった後を見せず、微かなふくらみも茂みも、ただ淡い肉体がそこにある。少なくとも今は傷一つない肌は、内側から発光しているかのように白く、柔らかな色合いを見せていた。

身体の熱が上がるような気がする。この身体が欲しいと、愚かな体が訴えかける。

「この後は……どう……すれば」

いいのかと尋ねる声は、消えそうに小さい。

視線を強く感じるのか、白い頬には完全に血が上り、焔のような緑の瞳はうっすらと潤んでいる。

「そっ……私……私の服を脱がせてその気にさせてみる」

「……」

言葉に瞳が歪んだ。逡巡するように視線がさ迷い、ケイの瞳と合う。少女の見せる弱さに、背筋に震えた。それが間違いなく快感だと知っている。

「どうした、しないのか」

平坦に響く声に、アルトリアの肩が揺れる。ケイは何もしない。ただ言葉だけで、少女を追いかけていく。

「分かり……ました」

身に纏うものをなくしたアルトリアが、一步、ケイの許に近づく。シャツに指が伸ばされ、服が床へと落とされる。震える指先はけれど、止まることなく一つ一つボタンを外していく。胸板が露になり、下肢も少女の手で開くことを指示する。共に戦場を駆ける身で、今更ごちらの裸体に意味などない。ただ、彼女の手で脱がせることに意味があっただけで。

アルトリアの指先がおずおずと胸に触れる。しっかりと付いた筋肉は少女には求めようもないもので、他意もなく感触を確かめる手に、ケイはため息を吐いた。

今ならきつと。まだ取戻しがきくのではないかと、そう思う感情を、怒りと欲情が焼いていく。

結局最も愚かなのは、間違いなく自分なのだろうと、そう。

触れる手を掴み、ベッドに腰を下ろす。先刻自らの手で広げられた合わせから見える昂ぶりに、アルトリアは瞳を伏せた。

「跪いて、舐め上げる。きちんと舐めさせて下さいと言うように」  
思考が徐々に混濁してくる。教育しているのかただ傷つけたのかそれとも自分が求めるものはただの快樂なのか分からなくなって、ケイはアルトリアの肩に触れた。

「んっ…」  
滑らかな肌は触れるだけで大きく震え、少女が声を上げる。  
もう既に頬だけでなく耳まで赤くなった顔は羞恥に至み、ケイを見る瞳には力がない。王ではない顔をさらけ出す少女に、下半身に血が集まっていく。

「言いなさい」  
丁寧な命令は、荒い言葉よりも意味があるようで、アルトリアは崩れ落ちるように床に膝を着いた。跪くように、下肢に顔を近づける。

「な…舐めさせて…くだ…さい…」  
消え入りそうな言葉と共に、きつく瞳を閉じたアルトリアはその先に唇をつけた。  
どうしていいのかわからずただ触れる唇は、当然の如くそんな事のためにあるものではなくて。汚しているのだという自覚は、罪悪感よりも興奮に繋がっていく。

「はっ…はふ…んむっ」  
竿を舐め上げさせ、亀頭を唇に含ませる。カリを舐めさせ、袋の部分を手で弄らせ、鈴口をつつかせる。必死に言われたとおりにしようとして、瞳を閉じて上下する表情に熱が増す。拙い手法はけれど、だからこそケイの興奮を煽った。

それでも負けず嫌いでは誰にも負けない誇り高い少女は、こんなことにすら一生懸命で。簡潔に言葉にするならば、習得が早い。

脳裏で光が点滅する。熱が一箇所に収束していく感覚に、ケイはアルトリアの髪に手を入れ大きく含ませた顔を押し付けた。

「んっ…んんんっ…」  
苦しそうな少女の声を無視して、口腔の粘膜を犯す。

「くっ…」  
そして、射精の瞬間、ケイはそれをアルトリアの口から引き抜いた。勢い良く飛ぶ飛沫が、少女の口元を頬を汚していく。

アルトリアの指が、不思議そうに頬を伝う粘液をぬぐう。その指先を口に含み、少女は小さく首を傾げた。

「にがいに…」  
幼い言葉は自らの行動の意味に気付いていない。無垢な表情故に淫蕩なそれに、ケイは息を呑んだ。

腕を掴み、乱暴に寝台の上に引きずり上げる。驚いて見開かれた緑の瞳を、ケイは覗き込んだ。この瞳に今の自分は、酷く醜く映っているのだろうか、そう思う。

けれど、自らの感情すら今は分からない。守りたいのか、大切にしたいのか傷つけたいのか。何を望むかすら。

ただ間違いなく、思考を灼いていく熱と衝動があることだけが、ケイの理解していることだった。



少女の声は、変わらず引つ切り無しに耳の中で反射する。目の前で揺れる乳房を、ケイは掌で押しつぶした。

「ひゃ…はんっ…ッ」

胸板から引き剥がそうとするかのように引き、握ねる。淡いピンクの乳首が勃ち上がり、指の間で擦れた。

「いたっ…いたいです…」

悲鳴が上がる。アルトリアの瞳は潤み、常に見せる意志の強さを映していない。同じように言葉も、幼く舌足らずになっていた。

白い乳房の上に、指の痕が赤く残っている。花びらのような痕跡が酷く綺麗で、ケイはその痕に唇を寄せた。舌でくすぐるように舐めると、身を振るように頭を振る。

荒い息は既に二人ともで。アルトリアは意識が朦朧としているのか、本当の少女のような顔を見せる。

「にい…さま…」

涙に濡れた瞳が、ケイを呼ぶ。もう遠い昔、彼女が従者として仕える前に自分を呼んだ名。既に男として育てられていたものの、二人がただ純粹に兄弟だった頃の、ケイの呼び名。

そして潤んで縋り付くように見る瞳は、あの日の少女を思い出させる。酷く健康で滅多に病気などすることのないアルトリアが高熱で寝込んだ日。既に従者として自分に仕え、誇り高き弟として騎士を目指していた少女があの日だけは、ケイの前で弱さを見せた。

そうあの日。二人きりの家の中であの日のあの瞬間だけ少女は、酷く弱い、守らなければならぬ妹で。そして自分もまた。あの瞬間だけは紛れもなく彼女を守る兄だった。

今何をしているのが、分からなくなっていく。むしろ取り戻しているのかと、そんな欺瞞を信じてしまいたいそうになる。

「腰を下ろして、自分で挿れてみる」

アルトリアが吐く息はもう火傷しそうなほどで。とろんと瞳を見つめる少女に、ケイは告げた。もうきつと思考能力をなくしているアルトリアが、ケイの下腹で固く張り詰めたものの上で、膝をつく。

「んくっ……は……っ」

腰を支えそれを手で押さえさせ、ゆっくりと腰を下ろさせる。ほとんど力が入っていない身体は、酷く簡単にそれを飲み込んでいく。

「っ……は」

濡れた粘膜に締め付けられる感覚に、背筋が栗立つ。脳髄を電流が走り抜けるような感覚に、ケイは声を上げた。

もう膝で支えることすら難しいのか、柔らかい身体が胸に凭れ掛かってくる。その身体を抱え、ケイはそのまま裏返した。擦り切れるような感覚に、意識が鈍る。

腕もつけない少女の身体を腰だけ上げさせ、ケイは奥へと突き上げた。もう声も出ないのかアルトリアはただ荒い息だけを吐いて、されるがままに揺さぶられている。

白い背中に汗が浮き、金の髪が濡れて首筋に張り付く。ケイを受け入れた内側は熱く濡れ、他の事が考えられなくなっていく。

そして。

「はっ……」

限界まで張り詰めた熱を、ケイは少女の中に吐き出した。断続的に吐き出される熱に、アル

トリアの身体が震える。

「はあっ、ふ」

荒い息を吐き出し、ケイはどきりと身体を寝台に横たえた。目の前で同じように力なく荒い息を吐く少女の背を包み込む。

酷く華奢な身体は、抱きしめればケイの腕にすっぽりと収まってしまふ。小さく震える身体が誰だか、分からなくなりそう、ケイは回す腕に少しだけ力を込めた。

弱く優しい、自分が守らなければならない少女がここにいるのではないかと、そう。

「愛しているよ、他の誰よりも」

耳元で呟く。そう、間違いなく愛している。この少女を、妹を。

その言葉にびくりと大きく背を震わせ、アルトリアはゆっくりとケイに向き直った。その瞳が見たことも無いほど哀しげな光を宿しているのに、口の端が上がる。

それはきつと、この情交を現実にしてしまう言葉で。そんな事は許されはしない。

「愛しているよ」

ケイはもう一度、繰り返し返した。笑みを浮かべたまま言葉が続ける。

「セーラやジョアンやシャロンと同じくらいに。へザーもリサもローラも。レンガも薔薇の花も馬も羊も、皆お前と同じくらい愛している」

そう告げると、細い眉が顰められ呆れたような瞳で見つめられる。その瞳にケイは声を立てて笑った。止まらないその笑い声がほんの少しおかしいことに、アルトリアは気付かない。その事実には救われる自分に、ケイは吐息を零した。



もう先刻から何度目になるのか。重なり合う剣戟の音に、ケイは柄を握った手に力を入れた。目の前から振りかぶってくるのは金の髪をきつちりと編み上げたケイの主。この国筆頭の騎士の剣に、掌が痺れるのを感じる。

練習の付き合いを頼まれたものの当然の如くこの少女に勝てるはずも無い。いつものように



何か姑息な手段でそろそろ終わりにしようと思線を巡らせ、こちらに向かって走ってくる少年の姿にケイは剣を引いた。

「どうしました？」

それに気付いて刃を下ろしたアルトリア——アーサー王が、不思議そうに首を傾げる。

「お迎えだ」

簡潔に答えて、ケイは少年を指差した。どちらを指しているのかはまだ分からなかったが、それでも政務に戻れとの呼出である事は明確で。

「陛下——！ガウェイン卿がお呼びです——！」

甲高い声が遠くから少女を呼ぶ。

「私か…失礼します」

その声にアルトリアはケイに背を向けた。真っ直ぐに伸びた背が遠ざかっていく、それにケイ乱れてしまった息を吐き出した。

情けない自分の状態と、息一つ乱さなかった主との落差に腹が立つ。

木立の中に作られた練習場に、ケイは一人立ち尽くした。地面に剣を突き立てる。

あの日のことは、全て忘れた。抱きしめた身体も、何もかも全て。

守りたいと願った幻想の少女はもうどこにもいない。ここにいるのは誰より強い、ケイの戴く王、その人だけだ。殺気を持って向かってくる、焔く瞳の少女。義務も責任も全て負って、孤高に立つその横顔を、ケイはただ見ることしか出来ない。

けれど。

「愛しているよ」

囁きは酷く小さく、風に乗った。

「愛しているよ、我が主」

そう、妹でも従者でもなく傳く存在である彼の人を、愛している。苦しみの中で一人である人を。救えることも出来ないまま、ただ。

命を賭けるというのなら賭けるだろう。この肉も感情も何もかも奪われても構わない。

捧げるというなら何もかもを捧げる。けれど、例え何を捧げ失おうと、それで彼女に与えられるものなど一つもない。

「…くっくっく」

愚かさに、ケイは笑った。本当になんて愚かで意味の無い。空は青く澄み、木々の間を風が抜ける。自らもまた執務に戻るために、ケイは足を踏み出した。

ちょっとした戯言@井ノ上

今回サー・ケイお兄ちゃんとセイバーというのは、ホロウでした一くらいしすを見た時からやりたかったネタだったのですが、大概飛び道具で申し訳ありませんでした…orz

誰だよと思われた方。ええとアーサー王の義理の兄で国務長官で剣の腕はそんなに立たないものの、めたらやったら口の立つお人がいらっしやった模様です。

そんな訳で微妙に兄妹属性のある井ノ上でした。妄想爆発お目汚し失礼！



まほしき  
ちきちき☆マシーン  
文：井ノ上 翠  
絵：田那辺 学

『まほしき』

Fate/stay night FANBOOK

2006/8/13 発行

ちきちき☆マシーン

文：井ノ上 翠

絵：田那辺 学

URL <http://akasaka.cool.ne.jp/chicken2m/>

MAIL [tanabesatoru\\_chicken@yahoo.co.jp](mailto:tanabesatoru_chicken@yahoo.co.jp)

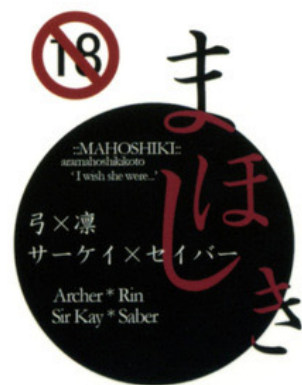
サンライズパブリケーションさま 印刷

SPECIAL THANKS!

翠川ミヒロさま

■ 18歳未満購読禁止

■ 禁・無断転載



**Fate/stay night FANBOOK #6**  
**2006 summer CHICKEN CHICKEN MACHINE**  
**not under 18yrs.**